会社は、即刻準備書面を取り下げよ！

真実はどんなことだったか

―座談会―

三川大災害裁判の法廷で、三井鉱山はその準備書面を通じ、あくまでこの法廷で正義をつらぬくために奮闘している原告の三池労組側に対し、断じて許すことのできない攻撃を加えてきました。（本紙前号で抜粋紹介）

この会社側の準備書面をめぐって、六月二十七日、原告の次の人びとが組合本部に集まり、お互いに過去十三年間積み重ねてきた苦しい経験・事実を出し合い、話し合うことができました。

ともあれこの日の話し合い参加者は、次の人びとでした。（敬称略）

遺族＝溝口生松、永江ミユキ、溝口富美子、釘崎スミ子、森キヨカ、富田艶子、中西文子。**CO患者**＝小川紘志、加藤秀雄、勝永末人、林田繁行、佐藤勉、古閑吉郎。**CO患者家族**＝石原マサ子、後藤潜子（以上順序不同）

右の人びとは、果たして何を語ったでしょうか。次は、おもな発言を抜粋したものですが……。司会は谷端財務長。

谷端　本紙前号記事ですでにご承知のように、三井鉱山は三川鉱炭じん大爆発の原因について十分ゆきとどいた対策をやっていたから、会社に災害責任はないのだ、と主張しています。

これは大災害裁判のなかで、三井鉱山が被告として裁判所に提出した準備書面で、堂々と主張しているところです。それどころか、会社側の準備書面は、それに先だって、裁判所に出しました私たちの側の準備書面に対して、ウソばかり書いているとか、言葉がいたずらに煽情的・刺激的なだけで、何を目的にしたものかわからないとか、あるいは人殺し合理化だとか、生産第一主義にもとずく労働者の大虐殺だとか、激しい言葉をならべ立てているが、原告らのこんな主張は、嗤われるべきであるときえ述べて私たちの準備書面に攻撃を加えてきているわけです。

こんなことまでいっています――「原告の準備書面は、坑底を歩けば三メートル先も、舞いあがる炭じんのため見えない坑道をつくり出してしまった、といっているが、本件坑道（爆発を起こした大斜坑道のこと）は、送炭ベルトが原炭を積載してフル稼動している最中でも、坑底から二千メートル先の坑口がはっきり見えた」。

こんな不遜な態度が、果たして見過ごせるもんですかね。

忘れぬあの日

中西　会社はあの当時、坑内保安は十二分にゆきとどいた対策をやっていた、といっているということですけど、そんなことは絶対にありません。

私の主人はあの大爆発で殺された一人ですけど、払採炭工として三川鉱の坑底で働いていました。

その主人が亡くなる以前の或る日のこと、二番方勤務を終えて帰ってくる早々いったものです――「今日もまた一人殺された。田川からきている人だったが、俺も会社からいつ殺されるかわからん。もう、働きに出てゆきたくなくなった」。

実は主人は、大爆発で死ぬ一カ月ほど前に、もう炭鉱をやめようと決心したものでした。私としてはどうしても「そんならやめなさい」、とはいいきれんやったわけです。

私は今もはっきりおぼえております。

保安どころか

永江　死人に口なしで、会社は、大斜坑道の保安対策が十分だったなどと、よくもいえたもんですよ。

うちの主人も大爆発で殺されたのですけど、当時まったく同じようなことをいっておりました。

溝口　例の三池闘争前までは、そのベルトコンベヤーの一台に一人の割合で当番がついていたのが、三池闘争後は二台に一人となり、三台に一人となり、四台に一人となり、ポッコリ足跡のつくが。何ごとか起らんとよかが」、といっていたんです。

そういわれても、坑内のことを知らない私にはのみこめませんので、「なぜ」と聞きますと、主人はいいました――「あそこには、電気でん、何でんあっとぞ」と。

そんなわけで、主人も炭鉱をやめることばかり考えていました。

古閑　私は、以前は坑内機械工で、問題の大斜坑道のベルトコンベヤーの当番だったんです。

もともと大斜坑道には、十二台の揚炭ベルトが据わっていて、切羽で掘り出されてくる石炭を、坑底から坑外へ、ホッパーへと運んでいます。

相次ぐ熱中症

釘崎　私にも、保安のために心を砕くような会社だとは、とても思えませんでした。うちの主人の例を見ても、はっきりしています。亡くなった主人は仕繰工で坑道を維持するための補修がおもな仕事だったのですけど、主人はその間に、三池労組員はそこからちょうど、死にに出勤していったように思われて仕方がないのですよ。

後藤　うちの主人は、生きてこそ帰ってきてくれましたもののとり返しのつかぬCO患者にされてしまいました。あの日以来、入院のままです。

主人は払採炭夫でした。職制から差別配役を受けて、ひどい高温の切羽に追いやられたんです。

その主人が自分自身あの熱中症でやられ、指がカラス曲りしてしまって動かなくなったことが再三でした。

毎日、仕事を終えて帰ってくる主人を見ますと、両眼はすっかり落ちくぼんでしまい、げっそりしていました。

「もうダメばい。体がもてん。会社をやめる」――主人も、とうとうやめる決心を固めたところだったのでしたのに。

富田　主人は、家では会社のことを絶対口にしない人でしただけど、やめるようにいっていたことは、皆さんの場合とまったくかわりはございませんでした。

石炭掘れ掘れ

小川　私は、以前は常一番の坑内電気工で、切羽で毎日働いていた者です。

私は、採炭作業をよく見てきましたが、水をまいて仕事をやるといった余裕などなかったですね。

しかも、炭じんが舞いあがっている切羽で、電気熔接をやらされる。せめて、パンツアーコンベヤーでもとめてやることくらい考えるべきなのに、それをとめる暇などもありませんでした。

加藤　私はあのころ開発の仕繰工として働いていましたが、採炭に応援にやられたわけです。

ある日のこと、炭壁にダイナマイトをこめて打ち終ったところでふと気づいたのですが、頭のまうえの天盤に、松岩が顔を出していたんです。

さっそく係員を呼んで、「大丈夫かね」と念を押しましたところが、その係員は、手にもっていたあの杖で松岩の頭をポンポンたたいてから、「大丈夫」といったわけです。

それでも私たちにはあぶなく思われてならんじゃったですが、いいつけられた作業をするためにほかの場所に移っていったんです。

しばらくすると、「タンカ、タンカ」と叫ぶ声。あわててひっかえしてきて見たら、さっき私たちが係員に、その安全性をたしかめさせたばかりの太い松岩が落ちてきて、一人のなかまが膝からむこうズネにかけて、脚の前側をパックリと切り裂かれていたつですよ。

「ア、この場所は、つい今しがたまで自分たちが作業していたところだ」、と思いますと、ゾッとしましたね。

そのほか、私自身その悲惨な場面を見た落盤死がそのころ二回。石炭ばかりをやれ掘れそれ掘れと目のいろを変えていたのが、あのころの会社じゃなかですか。

中西　とにかく、毎日、酒のなかにつかるようにして暮らしていました主人が、まったく酒がのめんことなってしまって。

遅れた救護隊

谷端　会社側の準備書面はまた、爆発が発生すると、救護活動も最大限行った、などといっておりますが。

永江　聞きますと、会社の救護隊はあの日、半分の者が黒川温泉に遊びにいっていたそうではないですか。会社が残りの半分の救護隊を坑内にさげたのさえ、三池労組で緊急に編成して坑底にさし向けた救護隊の方よりはるかに遅れたのでしょう。

谷端　三川支部長だった私自身が、とにかく支部の周辺にいた組合員に呼びかけてさがってもらったのでしたが、その時間がその日の午後五時半。爆発から二時間余り過ぎたころでした。

永江　ところが、かんじんの会社が救護隊をさげたのは、それからずっとあと。

小川　私たちCO患者のために、ついに組合の強く正しい要求を拒むことができず、特殊な職場を造ってくれたことはよいとして、実態はテイのよい〝うば棄てヤマ〟ですね。そこには、誠実な対策のカケラもありません。

默る法はない

溝口　こんな準備書面なんか、即刻取り下げるように要求しにゆくべきですね。かんじんの災害責任の方は棚あげにして、よくもこんな出まかせが書かれたものです。

黙っている法はなかですよ。

谷端　ほんとに、黙っているときではないのじゃないですか。今こそ原告団の皆さん一人ひとりが、これらの準備書面をまず学習することによって、被告の会社がいったいどんなことを考えているのかを正確につかんで、そしてこれからどうするかを話し合い、さらにどのように行動するかを意志統一しなおす以外にない、と思います。

なるほど裁判闘争が、どれほど大きな意義をもっているかという点については疑う余地がないにしても、それはあくまで命を守るたたかい全体を構築しているなかの一つのたたかいだ、という認識を常にもっていることが大切なことだと思います。裁判闘争だけが命を守るたたかいのすべてだ、と思ってしまっては、重大な意義をもっている裁判闘争自体を力弱いものにしてしまう。このことをふり返って考えて見るべきではないですか。

とまれこのような会社の準備書面をそのまま見過ごしておくということは、同時に今後さらに大災害の発生を許すことに通じるわけですから、真剣な学習・話し合いを切に希望するわけです。とにかく、がんばってゆきましょう。

どこに誠意が

谷端　そんな会社がですよ、さらに犠牲者の遺族やCO被災者とその家族の皆さんに対しては、尽すだけのことは尽してきたとも準備書面でいっておりますが。

では皆さん、実際に自分自分の体で感じられたところは？

中西　私たち遺族が、災害の直接の責任者である三川鉱長に対して、抗議行動を起したときのことを今も忘れていません。

遅れて三川鉱の正門にかけつけた遺族の私たちをですよ、あの門の大扉を閉ざしてしめ出したばかりか、大の男の守衛が私たちの胸ぐらをつかんで「帰れ、帰れ」。

私はそのときほど、くやしい思いをしたことはございません。これが遺族に対する会社の仕打ちかと余りにも悲しく、あふれ出る涙をとめることができませんでした。

遺族やCO被災者に対する、三井鉱山の尽し方の手本ですよ。

石原　三池労組のCO患者といっしょに、大牟田労災療養所に入院して治療をつづけていました新労組のCO患者のもとにやってきては、新労組の幹部たちはさかんに、「あんたたちはなるべく早く退院しないと、働くにも職場がなくなってしまう……」と、言葉巧みに説得して療養所を退院させてしまったことは、だれ知らぬ者もないはずです。会社の指じガネにきまっていますよ。

たとえ小指ほどの補償にしたところが、会社が自からすすんでやってくれたことがありますか。そのたびに要求をつきつけ、あるときは三川鉱長室に座りこみ、あるときは三川鉱の坑底にまでもかけおりていって、女の身ながら命がけの座りこみを行ったり。そんなたたかいの結果、やっと獲得した補償の一つひとつなんですよ。

会社に勝手なことはいわせませんよ。

採炭夫の両眼は落ちくぼんで……
酒飲みは酒が飲めなくなった……
闘いがかろうじて命をささえ……
許してよいか、大災害を再び……

×　×